

# 二強くて二サガ<sub>4</sub>

N E W S A G A

阿部正行

Abe Masayuki

神秘と冒険者の国エッスの森で暮らすダークエルフの女戦士。

## パセラネ

パセラネと共に行動するユニコーン。神秘的な存在として崇められているが……

## ロアス

主人公の魔法剣士。一度魔王を倒したが、真紅の宝石の力で過去に戻り、再び冒険を始める。

## カイル

## ミナギ

暗殺をはじめとする闇の技術を受け継ぐ「シノビ」一族出身の美女。

## セラ

カイルの幼馴染で、女の子に目がないムードメーカー。

## リーゼ

おきななしみ  
カイルの幼馴染。格闘の才能があり、その腕前はかなりのもの。

## ゼウルス

一万歳を超える、ドラゴン達の長。

## エリナ

エッスの新米冒険者。『竜の巣』への案内役を買って出る。

## ウルザ

美しきエルフの精霊使い。カイルの村を訪れ、なほ崩的に仲間になる。

## シルドニア

マジックキング  
伝説の『魔法王』が自分の人格や知識の一部を複製した魔剣の精神体。

Main Characters

主な登場人物

神秘と冒険者の国。人族領のほぼ中央に位置するエッドスは、そう呼ばれていた。その特徴の一つは、国土の七割以上が森林に覆われていることだ。

ロインダース大陸の深い森には大抵魔獣がいるが、エッドスの森に棲息する魔獣の種類と数は飛びぬけて多い。その中には、高い知性と独自の魔法を操る強大な力を持った、伝説にしか登場しないような幻獣もいる。それこそ、エッドスが『神秘』の名を冠する由来だった。

もう一つの呼び名の由来は文字通りである。この国には多くの冒険者がいるのだ。

冒険者のことを端的に説明するのなら、『何でも屋』だ。ちよつとした配達や街から街への移動の護衛、錬金術れんきんじゆつの材料になる特殊な素材の調達、害になる魔獣の討伐や古代の遺跡探索等々……様々な仕事を請け負い、解決するのが彼らの仕事だった。

依頼の多くに危険が伴い、途中で命を落とすことも珍しくないが、その分見返りも大きいので、一攫千金いつかくせきんを求めて冒険者になる者は後を絶たない。

エッドスのある地域は、地脈と言われる大地の魔力の流れが強いらしく、それを利用した古代魔法王国ザーレスの実験場や遺跡が数多く残っている。遺跡<sup>トレジャーハント</sup>荒らし専門の冒険者にとつてはまさに宝の山。更にこの森の魔獣から採れる肉に毛皮、角や爪、血液などは多方面で有益な素材となる。

そういった理由から、エッドスにはとりわけ多くの冒険者が集まるのだ。

ガルガン帝国で行われたあの武術祭から三か月。

カイル達は今、エッドスの首都リネコルにいた。

「結局ほとんど何も解らなかったな……」

多くの人々が行き交い、活気に満ちたりコネルの大通り。しかし一行の先頭を歩いていたカイルは、そんな賑わいとは対照的な少し疲れた声で呟いた。

「仕方なからう、元々雲を掴むような話だ。お主としてそれほど期待してはおらんかったのだろう？」

いつも通り屋台で買った串焼き肉を齧りながら、隣を歩くシルドニアが応える。

カイル達がこの国に来たのには、二つの目的があった。

一つはメーラ教について調べるためだ。

帝国でカイルに接触してきたメーラ教徒のバーレルが、各地とやり取りしていた手紙。そこに隠されていた暗号をミナギが解読した結果、メーラ教の動向が僅<sup>わずか</sup>かながら判明し、このエッドス国で

何らかの活動をしているとの情報を得られた。

そこでこの国に来てはみたものの、手がかりらしきものは未だ掴めていない。

この三か月の間に色々と調べたが、結局ほとんど何も解らずじまいで、有力な手がかりがない以上、カイル側からメーラ教絡みでできることはない。

メーラ教に関してはガルガン帝国のような大国も調べているが、その実態はようとして知れない。大国でもそうなのだ。いくら優秀な密偵であるミナギがいても、そう簡単に実態が掴めるはずもない。シルドニアの言う通り、何か掴めれば幸運、というレベルの期待だった。

「……まあ確かに元々、ついでではあったからな。解っている限りの情報をまた帝国に知らせておくさ」

カイルが掴んだメーラ教の情報——といっても僅かばかりの足跡程度だが——は、第三皇子であるマイザーを通じて帝国に伝えている。

メーラ教とは決して相容<sup>あひま</sup>れない。追うのを諦める訳ではないが、他にやることもある。

「……次に奴らが何かしてきた時が勝負だな」

この三か月、メーラ教からの接触は無い。だからといって絶対に油断はできなかった。

「しかし何でお前はメーラ教に気に入られたんだ？」

「それは俺が聞きたいよ」

頭の後ろで手を組み、だらしく最後尾を歩いていたセランが欠伸交じりに尋ねると、カイルは心からのため息をつく。

カイル自身、何故自分がメーラ教に狙われることになったのか、理由が思い当たらない。売り出し中の英雄候補として目を付けられたかとも思ったが、それ以上の妙なこだわりが見受けられたし、あまりにも強引過ぎるのだ。

「気に入られる要素が解らない……俺に利用価値があると認めたとしても、おかしな点が……」理由が解れば対策も考えられるんだが……とカイルは頭を掻く。

「……そもそも、そのメーラ教ってのがよく解らないのよね」  
いまいち納得いかないと言うのはリーゼだ。

彼女達は武術祭が終わった後に、メーラ教のことを知った。しかしその後何も起きていないため、あまり実感が湧いていないようだった。

「それとあの女……ミナギの言うことに信頼はおけるのか？」

リーゼの隣のウルザが、難しい顔で言う。

ミナギは現在カイル達に同行していなかった。

あくまで金で雇われている一時的な関係だという姿勢をミナギは崩していない。必要な時に報告に来るだけなので、リーゼ達は最初に紹介された後、数度しか顔を合わせていなかった。

そんな事情も手伝い、ミナギの腕が立つのは解るが信頼できるのか怪しい、というのがリーゼとウルザの共通見解だ。

「……そこら辺は俺を信じてほしい。俺がミナギを雇うと決めたんだ。俺が全て責任を取る」

カイルがそう言うのと、少し不満げな顔ではあったが、リーゼとウルザもとりあえず納得したようだった。

二人の様子を見て、ミナギを紹介した時もひと悶着あったことを、カイルは思い出す。

出会った経緯は何か誤魔化したもの、リーゼは妙に邪推するし、ウルザも不機嫌になっていた。実際、ミナギは暗殺をも請け負う裏社会の人間だ。それを全く気にしない性分のシルドニアやセランはともかく、一般人に近い感性を持つ二人には、受け入れ難いものがあるのだろう。

前世で彼女の性格をよく知るカイルからしてみれば、ミナギの人格に問題はないし、むしろ大いに信頼していた。報酬を払っている限り、彼女が裏切ることなどないと確信している。

これからはミナギの協力が絶対に欠かせない。それでリーゼ達に不安を与えるなら何か対応を考えなければいけないのだが、まだ具体的な手は思いつかない。

（もうしばらくはこのままだな……距離を置いておけばいずれ慣れてくれるかもしれないし、あるいはなんらかの切っ掛けでもあれば……）

「それにしても本当、この国は冒険者が多いな」

セランが相変わらず気の抜けた口調で——しかしその目は鋭く周りを見ながら——言った。

確かに先ほどから、明らかに一般人とは違う、独特の雰囲気<sup>まじ</sup>を纏<sup>まと</sup>った者達と多くすれ違っている。兵士のように統一されている訳ではなく思い思いの武装をしているので、嫌でも目に入った。普通の街中ならば目立つであろうカイル達の姿も、この国では通行人の一部として埋もれてしまうくらいだ。

「それに景気もよさそうじゃ」

同じく周りを見渡し、シルドニアが言う。

リネコルは都市の規模こそ小さいが、建物の豪華さはジルグス王国やガルガン帝国にも引けを取らないほどに立派だった。国土の大半を森林で覆われている小国とはとても思えない。

「それはやはり冒険者が多いからだろう。この国にとって冒険者は大きな収入源だからな」

成功した冒険者の中には途方もない財と名誉、地位を手に入れる者も珍しくない。カイルが言う通り、その懐をあてにした冒険者向けの施設も多く、様々な点で優遇されるので、冒険者が更に集まりやすくなる。

金を持っている冒険者が集まり、その金を落とすことで、自然に都市が豊かになっていく。エツドスにとっては冒険者自体が国の一大産業なのだ。

「それでこれからどうすの？」

リーゼが尋ねた丁度その時——

「そうだな……もう一つの目的を果たすとするさ」

カイルは探していたある建物を見つけた。

『<sup>あかつき</sup>暁の火竜亭<sup>かりゆうてい</sup>』……ここのようだな

そこは石造りのしっかりとした建物で、『冒険者の酒場』と呼ばれる場所だった。様々な依頼を持ち込まれたり、仲間の募集や情報交換が行われたりと、冒険者達の拠点となっている。

この店で何より目立つのは、ドラゴンを模した立派な彫像が入口上部に飾ってあることだろう。牙を剥<sup>む</sup>いた、今にも動き出しそうな迫力のあるドラゴンだ。

その彫像を見たカイルは、このエツドスを表すもう一つの言葉を思い出す。

神秘と冒険者と——そしてドラゴンの国である、と。

## 2

『暁の火竜亭』に入ったカイル達が抱いた第一印象は、普通の大きな酒場とそれほど変わらないなということだった。

テーブル席がいくつか並び、カウンターの中には店主らしき中年男性がいて、その背後の壁一面に備えつけられた棚には酒瓶が並んでいる。

しかしよく見ると、普通の酒場と違う点もある。

たとえば、壁の一角に沢山の紙片が貼られていること。これは冒険者達に対する依頼書だ。

他の街なら引越しの手伝いや下水の掃除など、猛々しい冒険者向きとはとても思えない内容も多い。だがここエドスでは国の特性上、魔獣から採れる素材や遺跡の発掘物を調達してほしいという依頼が大半を占めている。

カウンターの隅にある受付のような場所には女性店員がいる。おそらくそこで依頼品や報酬のやり取りをするのだろう。

そして何よりも普通の酒場と違うのは、客層だ。

現在の店内には十人前後の客がいるが、誰もが剣なり魔法なり格闘なり、何かしらの戦う術を高いレベルで身につけている。そうカイルは肌で感じ取っていた。

その冒険者達は、初めて見るカイル達のことをさりげなく、しかしじつとりと注視している。

エドスでも特に腕利きの冒険者が集まる店という評判を聞いていたカイルは、噂通りだと満足した。

カイルはカウンターまで行き、髭面でがっしりとした体格の店主らしき男の前に立った。

「見ない顔だな。うちは新人には最初は……」

「ああ、違う。依頼を請けに来たんじゃない。依頼を申し込みに来たんだ」

カイルの言葉に、店主は訝しげな顔になる。

この店は腕が立つ冒険者が集まる分、その報酬も高額だ。壁に貼られている依頼書も難易度の高いものばかりである。

そのため依頼者の大半は、大商人や貴族というそれなりの地位か財産を持つ者がほとんどだった。カイルのような若い依頼人は珍しいのだ。

とはいえ冒険者が冒険者を雇うことも珍しくはないので、店主は気を取り直してもう一度話しかける。

「まあ手数料として依頼料の一角を店が貰えれば、依頼は誰でもできる。それを請ける請けないはいづらの自由だが……」

店主はテーブル席の冒険者達をちらりと見る。

冒険者の酒場で依頼を請けることができるのは、店主に認められた者だけである。必然的に、店主の目利きがその店の評判を左右する。

一流どころの冒険者達を日夜相手にして目の肥えた店主は、カイル達の装備が他の冒険者と比しても群を抜いており、それに見合った腕もあるとすぐに見抜いた。

「で、依頼内容は？」

「森に精通している冒険者を雇いたい。ある場所への案内を頼みたくて」

「ある場所？」

「……『竜の巣』  
ドラゴンズネスト」

カイルがゆっくりと言ったその言葉は、店内に衝撃を走らせた。

ドラゴン——実際にその姿を見た者は少なくとも、名前だけは五歳の子供でも知っている、最強の幻獣だ。

神話時代を生きた最初にして最強の『神竜』を始祖とするこの生物は、肉体的な強さは言うに及ばず、高い知性をも兼ね備えており、魔族すら超える力を持っていた。

だがそんなドラゴン達の数には人族はおろか魔族よりもはるかに少ない。そのため、歴史上その存在感が揺らぐことはなかったが、歴史そのものを変えることもなかった。しかも時が経つにつれ、更にその数を減らしているという。現在ではこの大陸における人族領のほとんどで見かけなくなっていた。

しかしこのエドスでは比較的目標例が多く、人族領で唯一ドラゴンがいることが確認されている。

それ故にエドスはドラゴンの国とも呼ばれて、その棲息地には『竜の巣』という名がつけられていた。

「報酬は……十万ガドル払う」

店主が何か言う前にカイルが報酬を提示すると、更に周りがざわめいた。

普通の国民なら十年は暮らせる、破格の報酬だ。

『竜の巣』は、ドラゴンが棲まうだけあってエドス国でも最も奥深く、同時に最も危険な場所にある。一流の冒険者ですら命がいくつあっても足りないような危険を伴うが、それでもカイルの提示額は充分以上に見合う金額と言っている。

しばし呆気にとられていた店主だったが、頭を振って気を取り直し、カイルに聞く。

「……何しに行く気だ？ まさか『竜殺し』  
ドラゴンスレイヤーでも目指すつもりか？」

『竜殺し』は文字通りドラゴンを倒した者を指す称号で、これまでわずか数人のみが得た、まさに歴史に名を残す英雄の証だ。

「行く理由は言えない。それを含めた高額報酬と思っしてほしい。何なら片道だけでもいい」

あえて淡淡と言いながら、カイルは一万ガドル分のザールズ金貨を取り出し、カウンターのの上に置く。

色々疑問は尽きないが、断る理由は無い。店主はカイルの依頼を認めることにした。  
「……依頼人の、お前の名前は？」

壁に貼る依頼用紙に内容を書き込みつつ、店主が尋ねる。

「カイル、カイル・レナードと言う」

周りに聞こえるように、意識的に大きめの声でカイルは名乗った。

その瞬間、元々注目されていたカイル達に更に視線が集中する。そしてその視線には、はつきりと不快感や敵意に近いものが混じっていた。

「解っていたことだが評判悪いなあ、こりゃまいったね」

言葉の内容とは裏腹に、とても面白がついていそうな口調と不敵な顔でセランが言う。

リーゼやウルザは仕方ないか、と苦笑いだ。

「まあ想定内じゃろう」

シルドニアも冒険者達の視線に全くこたえることなく、当然じやなという顔をしていた。

彼らのこうした反応は、カイル達がこの三か月の間に行ってきたことが原因だった。

簡単に言えば、慈善活動だ。

この時代、どの国でも中央部はともかく地方ともなると国の保護を得られず、ほとんど自力で統

治を行っている場合が多い。

カイルはそんな国の支援が届かない田舎の、特に魔獣の被害を受けたり、盗賊に悩まされたりしている村などを周り、元凶を片っ端から退治していったのだ。

それも無償で。更に被害がより深刻なところには充分な施<sup>ほどこ</sup>しまでして。

手っ取り早く名声を高める方法として考えたこの無償奉仕を、メーラ教について調べる傍<sup>かたわ</sup>ら、積極的に言い続けた。

更にカイルは吟遊詩人を何人も雇い、このことを事実七割誇張三割ぐらいに脚色して、美談として広めさせた。

元々ミレーナ王女の救出や、武術祭での派手な活躍などの下地があったため、カイルの名声は一気に多くの国で知れ渡り、本格的に英雄への道を歩みつつある。

だがこれにより、困る者達があった。本来そういった魔獣を退治して糧<sup>かて</sup>を得ていた冒険者達だ。

冒険者でもないカイルに商売の機会を奪われること自体腹立たしいし、しかもそれを無料でやられるとなれば、自分達が報酬を受け取りにくくなってしまふ。

要するに『余計なことをしやがって』という訳だ。冒険者達にとって、カイルは商売の邪魔をししている偽善者に過ぎないのだ。

「そうか……お前がなあ……」

名乗ったカイルを改めて見た店主は明らかに、厄介事が舞い込んできた、と苦々しい顔になる。だが既に手数料を受け取っているし、はっきりと依頼を認めてしまっているの、今更拒否もできない。

「では明日また来るので」

カイルは軽く頭を下げた後、突き刺すような視線の中、何食わぬ顔で外へと出ていった。

「あれで良かったの？ どう見ても良い印象じゃなかったけど」

酒場を出てすぐ、リーゼがカイルに聞いてくる。

「確かにあれでは、大金を積んでも依頼を請ける者がいるかどうか」

ウルザも渋い顔で言った。

「ああ、それはそれで別に構わない。案内がいた方が楽ではあるが、いなくてもウルザがいれば何とかなる。エルフにとつて森は庭のようなものだろう？」

カイルは頼もしげにウルザを見つめる。

エルフは生まれながらの森の住人だ。更に優秀な精霊使いであるウルザは、植物の精霊を操ることもでき、たとえ初めて来た森でも迷うことはないだろう。

ウルザが当然だと言わんばかりに頷くが、すぐに不安げな顔になった。



「まあな……しかしだ、本当にドラゴンと会うつもりなのか？」

「ああ、そこは妾に任せよ。妾の時代のドラゴン達の長、『竜王』ゼウルスならよく知っておる。あれからざっと千と三百年は経っておるが、奴のことじゃからまだ生きてはおるじやろ……」

『魔法王』ことシルドニアが自信満々に笑った。

カイルの目的——それはドラゴンと交渉し、取引を行うことだった。

### 3

翌日の昼頃、カイルは『暁の火竜亭』を再度訪れた。

今日はカイル一人だ。他の面々には森に入るための準備を進めてもらっている。

店内では何組もの冒険者達が何かしらの雑談をしていたが、カイルの姿を見た途端、一斉に好意的でない視線を突き刺してきた。

壁を見れば、カイルの依頼書は最も目立たない隅に貼られており、それだけで歓迎されていないのが解った。

随分と嫌われたな、と心の中で苦笑するが、ある意味予定通り。あえて無視して、そのままカウ

ンターの、これまた苦虫をかみつぶしたかのような顔でカイルを見ている店主に話しかける。

「その表情から大体予想はつくが、依頼を請けようというヤツはいなさそうだな」

内心を隠して少し残念そうに装ったカイルが尋ねると、店主は眉をひそめたまま頷いた。

「そうか、残念だな……」

カイルは軽くため息をつき、じゃあ依頼は取り下げようと伝え、早々に引き上げようとした。その時、背後から声がかかった。

「一応忠告しておく。いつ出発予定か知らんが、どんなに高額でもその依頼を請けるヤツはいないぞ」

声の主は、がっしりとした体格の大柄な戦士だ。昨日は見なかった男だなとカイルは思った。

装備はカイルの目から見ても一級品で、充分に使い込まれており、その物腰や独特の雰囲気からも、歴戦の猛者だと解る。

「えっと……名前を聞いてもいいかな」

「ゲツガだ」

愛想のかけらもなく、男は簡潔に名乗る。

何か言いたそうだった他の冒険者達は勿論、店主まで黙ったところを見ると、相当な信頼を得ているようだ。

カイルも名乗ろうとしたが、それに構わずゲツガは一方的に喋り出す。

「色々と時期が悪い。まず、最近は密猟が多いんだ」

「密猟？ この国じゃ魔獣の狩りは無制限のはずだが？」

エドゥスにおいて魔獣はいわば特産品の一つ。魔獣狩りはむしろ推奨されている。

「その通りだが、一か所だけ例外がある。森に住むダークエルフ達の自治領、そこだけは立ち入り禁止なんだ」

ダークエルフ——エルフよりも更に閉鎖的な種族で、人間の住む地域で姿を見ることはまずない。外見はエルフと酷似しているが、肌の色は闇に近い褐色で、白い肌の多いエルフとは対照的だ。

「ダークエルフ達はエドゥスができる前からあの森に住んでいる。建国の際に不可侵の条約を結んでいたとかで自治を認められていて、今でも居住地一帯にはダークエルフの許可がなければ入れない決まりになっている」

もともとダークエルフから許可を得たヤツなんていないがな、と過去の苦勞を思い出したのか、ゲツガは苦笑している。

「そして知恵を持つ一部の幻獣、特にユニコーンなんかは完全にダークエルフ達と共存していて、手が出せないんだ」

ユニコーンとは、見た目は白馬で、頭部に角が生えている幻獣だ。

その角は回復に係する魔法薬の材料において最も価値のあるものとされ、それ故狙われ続けて

きた。今では大陸全体でもほとんど見かけられず、このエドゥスに僅かばかりの数が棲息しているだけだ。

現在の相場だと、ユニコーンの角は同じ重さの黄金よりもはるかに価値が高くなっている。

「だが最近、その自治領に無断で侵入し、狩りを行っている奴らがいるらしい。そのせいでダークエルフ達は警戒……いやほとんど敵対状態になっていて、近づいただけで攻撃されてしまう。既にトラブルになり、命からがら逃げ出してきた奴も多数いて……そして、『竜の巣』に向かうにはダークエルフの居住地を絶対に通らなければならない」

「なるほど……森の中でダークエルフ達と戦うなんて、ほとんど自殺行為だしな」

エルフと同じく森の住人と称えられる彼らの領域で戦うなど、愚の骨頂と言える。

「あともう一つ、ドラゴンが最近妙に活発に行動しているんだ」  
ドラゴンの国と言われているエドゥスだが、それでも年に一回遠くを飛ぶ姿が見られるか、くらいではない。それほど人間とドラゴンの棲む世界は離れている。

だがこのひと月の間は事情が異なり、何度も目撃されていた。森で狩りを行っていた一部の冒険者に至っては、かなり至近距離でドラゴンを見かけたと言っているのだ。

「目撃情報からすれば同じドラゴンのように、色々な場所に出現している……むやみに刺激したくないし、出会いたくもないのだ。皆全体的に森に入るのを控えている」

「なるほど……それでか」

昼間だというのに妙に店内に冒険者達が多いのを見て、カイルは納得する。ドラゴンとの遭遇は、熟練の冒険者にとつてもそれだけ警戒すべきことなのだろう。

「そして最後に……こつちの理由は自覚しているだろう？」

ゲツガがかなりきつい目つきでカイルを睨む。

カイルもさすがに少しづつが悪くなり、軽く頬を掻く。

「あゝ……しかし、それにしてはやけに親切だな？」

「親切なんかじゃないさ……早い話が、とつとといなくなってくれ、つてことだ」

確かにゲツガの口調は、親切とはほど遠い。

「それでも俺にとつてはありがたい忠告さ……じゃあその忠告通り、この依頼は取り下げることにするよ」

カイルは壁に向かい、自ら依頼書を剥がした。

「いいのか？ 前金は返さないぞ？」

店主が少し驚いたように言う。これでは無駄に大金を払っただけでしかないからだ。

「ああ、かまわない。金さえ積みば請けてもらえらと思つていた俺が甘かつただけさ」

もっとも目的は果たしたがな、とカイルは心の中で付け足した後、さっさと店を出ていこうとする。

「最後に一つだけ聞きたい、お前は何をしに『竜の巣』に行くんだ？」

そんなカイルの様子が気になったのか、店を出ようとするカイルの背中にゲツガが疑問を投げかける。

「……なに、ちよつと話し合いに行くだけさ」

意味ありげな笑みを浮かべた後、カイルは店を出た。

『暁の火竜亭』を出て、カイルは大通りを歩き始める。

すると、フードを被つて人相を解らなくした何者かが、音もなく、それでいて自然な動きで近寄ってきて、その斜め前を歩く。

「……どうだったの？」

どういう技術なのか、前を歩いているというのに、その声はカイルにもはっきりと聞こえた。

「ああ、予定通りだったよ。ミナギの方はどうだ？」

近寄ってきた人影——ミナギにカイルは小声で答える。

周りからは二人が別々に歩いているだけにしか見えないだろう。

「ええ、こつちも問題ないわ。数日もすればカイルが『竜の巣』に向かつたつて噂が広まると思う」カイルは、案内人を請ける冒険者が現れるとは初めから期待していなかった。

それでも依頼を出したのは、これから『竜の巣』に向かうということを宣伝するため。つまり依頼すること自体が重要だったのだ。

ミナギにはそれに尾ひれをつけるように街中に噂をばらまいてもらっていた。

大金を払ってでも『竜の巣』に向かいたい理由は何か——憶測は憶測を呼び、あつという間に広まってくれるだろう。

「でも面倒な真似するわね」

「後々必要になってくるから念を入れて広めておきたかったのもあるが……これからはとにかく目立つように行動したいのだから」

一挙手一投足が注目されるような英雄になるのが、カイルの目的だ。

「ドラゴンとの交渉も英雄になるための一環なのでしょうけど……本気でやるつもり？」

本気、と言うより正気を疑うかのようにミナギが聞く。

「ああ、無茶かもしれないが無謀ではない。ちゃんと成功の見込みがあつてのことだ」

そしてこれは、どうしてもやらなきゃいけないことなんだ——カイルはそう心の中で付け加える。それこそ人種の存亡にかかわることなのだから。

歴史上、人族と魔族双方に対して常に中立、というか自ら率先して関わることのなかったドラゴン達であつたが、前世で起きた人類の存続を懸けた戦いである『大侵攻』時には魔族の味方をし、

人族を攻撃した。

これに関しては、ドラゴンについて詳しかったシルドニアも大いに驚いていた。

誇り高いドラゴン達が魔族に従う形で協力するなど、到底考えられなかったからだ。

おそらくなんらかの理由で手を貸さざるを得なかったのだろう、とシルドニアは推測している。

実際、直接対峙したカイルの目から見ても、ドラゴンの攻撃は散発的で効率が悪く、明らかに嫌々行っていると感じられた。

もしドラゴン達が積極的に攻めて来ていたら、人族は間違いなく滅んでいただろうから、その点では幸運だった。

だが幸運に頼っている訳にはいかない。ドラゴンには中立を守ってもらうか、できれば人族に味方してもらいたい。そのための交渉だった。

（魔族の味方をした……いや味方せざるを得なかった理由も知りたいところだな）

ドラゴン側から進んで魔族に協力することは、間違いない。だから最悪でも、魔族には協力しないよう、先に約束を取り付けたい。

この交渉に関しては充分成功の目がある、というのがシルドニアの意見だった。

人族が最も勢力を誇った古代魔法王国ザールズの時代、つまり今から千年以上前の話だが、当時はドラゴンともある程度交流があつたという。シルドニアは「少なくとも問答無用で攻撃されるこ

とはない」と自信ありげだ。

「あのシルドニアが伝説の『魔法王』というのは……いまだに信じがたいのだけど」

以前ガルガン帝国の晩餐会<sup>ばんさんかい</sup>にて、シルドニアと料理を取り合ったことを思い出しながら、ミナギは頭痛でもしたかのように眉間<sup>まゐかん</sup>を人差し指で押さえる。

「まあいいわ、それと例のアレ<sup>アレ</sup>だけど、どう……」

すればいい——ミナギがそう聞こうとした時、背後から声がかかった。

「待ってください！」

何やら切羽詰まった声だった。

## 4

一行が振り向くと、そこに立っていたのはおそらくカイルより少し年下くらいの少女だった。

革鎧の上に実用一点張りの丈夫そうなマントを羽織り、頭は厚手の帯状の布を巻きつけて覆っている。それに加えて小型の弓と矢筒<sup>しやうていぼつ</sup>を背にしよった、典型的なレンジャー姿だ。

少し幼いながらも整った顔立ちの美しい少女は、芯の強そうな目でカイルを見つめている。

その目を見た時、カイルは妙な心のざわつきを覚えたが、それを抑え、冷静に話しかける。

「俺に何か用かな？」

この時点でミナギの姿はもうない。

彼女の役目は完全な裏方であり、人前で一緒にいるところを見せない方が色々都合が良いのだ。「カイルさんですね！ わたしはエリナと言います。あの……『竜の巣』への案内人を探していると聞きました！ わたしを雇ってくださいませんか！ お願いします！」

エリナが、地面に擦り付け<sup>こす</sup>んばかりの勢いで頭を下げて頼み込んでくる。

「あ……」

カイルはやっぱり来たかという思いで頬を掻きながら、少女を見ていた。

「も、もう決まってしまったのでしょうか？」

カイルの反応に焦ったようにエリナが聞く。

「いや、まだだが……」

「だったら是非お願いします！ わたしは薬草などの採集専門で、森には毎日のように入っていますので！」

必死とすら言えるアピールだったが、カイルはどう断ったものかと悩んでいた。

案内人を雇おうとしたのはあくまで『竜の巣』に向かうことを広めるための布石で、本当に雇う

つもりはなかった。

ただ、目立つために依頼料を十万ガドルという大金にしたので、たとえ冒険者に評判の悪いカイルが依頼人でも、あるいは請けようとする者が現れるという可能性はあった。

それを回避するために、周りの評価にも気を使うような一流の冒険者が集まる『暁の火竜亭』に依頼し、一日と経たずに取り下げたのだ。

もし売り込みがあった場合、当初の予定では適当に難癖をつけて断る考えだった。エリナの場合なら、若すぎるという点が断る理由になるだろう。

そして、もう一つ気になる点があった。

「一つ確認したいが……俺が依頼したのは『暁の火竜亭』で、君はそこに所属している訳ではない、そうだな？」

先ほどの店内にエリナがいなかったことを思い出しながら、カイルが聞く。

「……………はい。カイルさんが大金を出して『竜の巣』への案内人を探していると聞いて、急いで駆けつけました」

エリナはうつむきながら絞り出すように声を出す。

冒険者の酒場に依頼した場合、その酒場に所属している冒険者しか、その依頼を請けられない。こういった依頼への横入り禁止が明文化されている訳ではないが、暗黙の了解として広く受け入

れられている。

もしそんなことをして噂が広まれば、冒険者としての信用を失うことになる。

「それがどういう意味を持っているか解ってるのか？」

「構いません、何ならこの依頼を最後に冒険者を辞めてもいいです！」

それは覚悟のこもった本気の目だった。

既に『暁の火竜亭』への依頼は取り下げているので正確には横入りではないのだが、エリナ自身暗黙の了解を破っていると自覚しているようだ。

今二人が話している場所は大通りだ。既に道行く周りの人々からも注目されつつある。この噂はすぐに広がるだろう。

「そこまでして請けたい理由は……」

「勿論お金のためです。どうしても必要なんです」

はつきりと、エリナは言い切った。

「そうか……」

何のために必要か、カイルはあえて聞かなかった。金がいる理由など人それぞれだし、安易に踏み込むべきではないからだ。

ただエリナが、後がない背水の陣で自分の前に立っていることだけは理解できた。

「あ、あの……今ダークエルフ達が他の人族を排除しようとしているのはご存知でしょうか？ 私  
はあの付近にも詳しいんです！」

エリナが何とかカイルの興味を引こうと更に必死に訴える中、カイルはダークエルフという言葉  
に反応した。

「それは本当か？ できればダークエルフ達とは接触せずに『竜の巣』に向かいたいんだが」

「は、はい！ 母も元冒険者で、その母が作った詳細な地図もあります！」

エリナはここぞとばかりに売り込んでくる。

「うん……………」

ここでカイルは考え込んでしまう。

本当に雇うつもりはなかった案内人だが、ダークエルフの件は予想外だったのも事実。カイルも  
無用なトラブルは起こしたくない。

エリナの案内で本当にダークエルフとの接触を避けられるなら、雇う価値はあるはずだ。

「……解った、雇おう。ただし報酬は依頼が終わった後で、前金は無し。それでいいか？」

「あ、ありがとうございます！ 頑張ります！」

それまで悲壮なまでに思いつめ、真剣な顔をしていたエリナが、心からほっとしたような顔で笑  
顔を見せた。

「出発は明日の夜明けで、東門に来てくれ」

「解りました！ 出発の準備をしますので失礼します！」

エリナは大きく頭を下げた後、走り去っていった。

その後ろ姿を見送ったカイルは、また自分でも解らない奇妙な感覚に捉われた。それから頭を軽  
く振って、リーゼ達との待ち合わせの場所に向かうのだった。

リーゼ達との待ち合わせ場所は街の中心部にある広場だ。そこはこのリネコルで最も賑やかな場  
所でもある。

石畳で舗装された広場は常時人で溢れていた。敷物の上に怪しげな商品を並べるうさん臭い露天  
商や、軽業で拍手と銅貨を集めている大道芸人、大声で辻説法（つじせっぽう）をしている秩序と法を司るレヴァイ  
ン神の信者など、多種多様な顔ぶれである。

分けても一番目立つのは、この国の特色ともいえるべき冒険者達だ。

狩りの成果らしき虹色に輝く煌びやかな毛皮や、幼児の身長ほどもあるかという巨大な牙を誇  
らしげに身につけて闊歩している。

そんな人々でごった返している広場だが、中心部の水場兼噴水の傍にいたリーゼとウルザ、シル  
ドニアの三人の美しさは特に目立っており、すぐに合流できた。

シルドニアはいつもの通り、屋台の品を買いこんでいる。エツドスの名物だという食用に適した魔獣の肉焼き、香草で包んだ串焼きを両手いっぱい持って、ご満悦だ。

リーゼとウルザも同じく屋台で買い物をしたらしく、果汁を冷やした水で割ったものを飲んで、ひと息ついている。

「お疲れ様……セランはどうした？」

カイルは旅の準備をしてくれた労をねぎらった後、見かけないセランのことを尋ねる。

「またどっかふらふらしてるわよ。もう少しで来ると思う」

いつものこと、とリーゼが呆れたようにため息混じりに答える。

「やはり冒険者の国だな、食料や日用品なども全部質のいいのが揃っていた。これで準備万端で明日出発できる……そっちはどうだった？」

ウルザが今日の買い出しの成果に満足しつつ、カイルに聞いた。

「ああ、結局案内人を雇うことになった」

「案内人は雇わないんじゃないのか？」

「それが少々事情が変わってな……」

カイルが密猟とダークエルフの件を説明すると、ウルザが難しい顔になった。

「ダークエルフか……私もダークエルフには会ったことがないのだが、とにかく他の人族に関わる

うとしない連中らしい……エルフの私が言うのも何だがな」

エルフとダークエルフは元々一つの種族だったが、遙か昔の神話の時代に二つに分かれたと言われている。

エルフにとっては特に敵対している訳でもなく、かといって親しい訳でもない、いわば顔も見たことのない遠い親戚のようなものらしい。

「他には何か知っているか？」

カイルもダークエルフについては詳しくなかった。『大侵攻』の最中にダークエルフとも共闘したが、碌に会話できなかった。

「そうだな……エルフのように、精霊魔法にはあまり適性がない。そのためか弓の扱いに優れていたり、様々な錬金術に詳しくあったりするらしいが……森で敵対すると厄介なのは間違いない。避けて通れるのならば、それに越したことはない」

エルフである自分がいてもどうなるかわからない、とウルザは言う。

「となるとその案内人が大事じゃな。どういう奴なんじゃ？」

「あ、ああ……それが……」

シルドニアが聞くと、カイルは少しためらいながら、自分のことを必死に売り込んできたエリナのことを話した。

「ふくん……女の子なんだ、それも何か勢いで雇ったみたいね」

カイルの説明を聞くにつれ、リーゼの目つきが段々険しくなっていく。

「しかしそんなにすぐに雇って良かったのか？ 実力のほども確認してないというのに」  
ウルザも顔をしかめて軽くカイルを睨む。金が欲しいだけの騙り者かもしれないと言っているのだ。

「うん？ ……えっとたぶん大丈夫だと思うが……地図もあると言っていたし……」

「では何らかの目的があつて、接触してきたという可能性は？」

「いや……それも無い……と思う……多分」

どんどんカイルの声が小さくなっていく。

エリナが現在最も警戒すべきメーラ教徒だったり、あるいはガルガン帝国の密偵だったりなど、何らかの目的を持っている可能性を全く考えていなかったことに、カイルは今になって気付いた。  
（確かに嘘を言っているようにには思わなかったが……何故俺はそういった可能性を考えなかった？  
真つ先に疑うべきことなのに）

まるでリーゼ達と対するように、無条件に信用してしまっていたのだ。

「ふむ、さては情にほだされたか？」

シルドニアが意地の悪そうな笑顔で言う。

「……全く同情していないとは言わないが、嘘を言っているようには思えなかったし、成功報酬ということにも納得していたからな……」

エリナの必死さから金に困っていたのは間違いないだろうが、それだけで雇った訳ではない……とカイルは自分に言い聞かせるように答える。

「要するに可愛かつたからだろ？」

いつの間にか来ていたセランが、カイルの背後から話に加わる。

「ああ、可愛いのは認めるが……って余計なことを言うな！」

「ははは、可愛い女の子が困って必死になったら、力になってやりたいのは当然だしな」

気持ちちはよく解る、と頷きながらカイルの肩を叩くセラン。

「ふくん、やっぱり可愛い女の子には弱いよね」

「前から思っていたが、異性に関してはセランよりカイルの方が性質が悪いかもしれんな……」  
リーゼとウルザが冷たい視線をカイルに突き刺す。

「結局男というものは千年たっても変わらぬということか」

シルドニアは何やら昔を思い出したのか、しみじみと語る。

「お前ら……好き勝手言ってくれるな」

頭を抱えてしまうが、まるで反論できないカイルだった。

翌日の早朝、まだ薄暗い中、カイル達は東の大門に来ていた。

リネコルをぐるりと囲っている街壁は、人族に対してのものでない。魔獣、最悪の場合ドラゴンの襲来を想定して造られている。両開きの大門は非常に分厚く頑丈で、重々しい。

門は日没と同時に閉められ、日の出と共に開けられる。カイル達の周りには、彼らと同じように開門と共に出発しようとしている行商人や旅人、そして森に入ろうとしている冒険者達が見受けられた。

「よ、よろしくお願いします！」

先に来ていたエリナがカイル達を見つけて駆け寄り、緊張した声で挨拶しながら大きく頭を下げた。

「……………」

だがカイルはそれに答えず、じつとエリナの顔を見る。

昨日もそうだったが、特に気になるのはその目だった。

カイル本人にも理由がよく解らないが、エリナの目を見る度に妙に心がざわついてくるのだ。

(どこかで会ったか？ 向こうには俺に対する面識はないようだから前の人生で……いや、間違はなく会った記憶はない。だとしたら……)

「えっと……………な、何か問題でも？」

難しい顔でじつと見られたことで困惑の表情になった後、もしかして依頼人の機嫌を損ねたのかと不安になり、エリナは慌てたような声を出す。

「女の子の顔をじろじろ見るんじゃないの！」

だが何か答える前に、リーゼの肘打ちがカイルの脇腹に突き刺さった。

「がぶっ!？」

ドラゴンレザーという最高級の鎧を身につけているはずなのに、がっくりと崩れ落ちる。

リーゼの放った肘打ちは、普通なら鎧に阻まれるはずの衝撃を肉体まで貫通させる、高度な技術が使われていた。少なくとも旅に出る前にはできなかったことだ。

これは彼女が旅の最中でも自己鍛錬を怠らなかつた努力の成果、そして実戦を潜り抜けてきた成長の証である。<sup>あかし</sup>

「う、腕を上げたな……け、けど……できればこういう形で知りたくはなかつた……」

リーゼが強くなるうとしているのは、他ならぬカイルのためである。自分の力になりたいという

リーゼの思いを身をもって知り、感謝と同時に脂汗が溢れ出てくるカイルだった。

「リーゼの突っ込みもだんだん洒落<sup>しゃれ</sup>にならなくなってきたな……」

普段からカイルと並んで突っ込みを受ける立場のセランも冷や汗をかく。うずくまるカイルを無視して、リーゼはエリナの方に向き直る。

「あ、あの……頑張りますのでよろしくお願いします！」

目の前で起こった暴行事件に呆然としつつ、エリナも気を取り直して気丈<sup>きじょう</sup>に挨拶をする。

どんな相手が来るのかと身構えていたリーゼだったが、エリナの先ほどの様子を肩の力を抜いた。

（……なるほど、放っておけない気持ちも解るかな）

リーゼにも、エリナの必死な様子が見て取れたのだ。

「あたしはリーゼって言うの、よろしくね」

続いてセラン、シルドニア、ウルザも軽く自己紹介をしていく。

エリナは、セランの軽薄な自己紹介には曖昧に微笑み、見た目は自分より小さな少女であるシルドニアの場違い感に少し首を傾げ、エルフであるウルザを見て驚いた表情になった。

「……地図を持っているとのことだが、見せてくれないか」

ウルザがそう言うと、エリナは慌てて懐から手製の地図を取り出す。

それを見たウルザは、描かれている図や記号、森の様子などについて質問した。それにエリナが淀みなく答えると、納得した様子で頷く。

「……かなり細部まで書き込まれている、良い出来だ」

これなら信用しても大丈夫そうだとウルザは太鼓判を押した。

「そ、そう言えば聞いていなかったが、仲間はいいののか？」

脇腹を押さえながら、カイルも質問する。

「は、はい……わたしは個人で活動しています。何か問題があるでしょうか？」

エリナの声は少し不安げだ。

冒険者は大抵徒党を組んで仕事をする。その方が効率がいいからだ。

一人で活動する冒険者は、完全な新人か、自分の実力に自信があるか、もしくは何らかの事情を抱えているか、だ。

「……いや、ちゃんと案内さえしてくれば問題ない。改めてよろしく頼む」

エリナがどれに当てはまるか解らないが、カイルにそこまで立ち入るつもりはなかった。

「は、はい！　ありがとうございます！」

カイルだけでなく、他の仲間にも認められたことで、安堵したらしい。エリナもようやく年相応の柔らかい表情になる。

そんなエリナにまた目を奪われそうになったカイルだったが、リーゼが発する不穏な気配を感じ、慌てて話題をそらす。

「そ、それにしてもさすが冒険者の国だな。早朝からこんなに大勢とは」  
周りの冒険者達を見ながら、カイルは感心したように言う。

「いえ、これでも最近は少ない方です。特に奥地へ向かう人は減っています」

エリナにそう言われ、カイルはさりげなく周りの会話に耳を傾ける。すると、皆やはり最近活発に活動しているドラゴンのことを話題に出していた。

ドラゴン相手には手の打ちようがないし、具体的な被害が出ている訳ではないので気を付ける以外どうしようもない、という感じだった。

「ドラゴンについては何か知っているか？」

カイルが聞くと、エリナは首を横に振る。

「わたしも遠くから見かけたことがあるだけで、詳しくは……ただ、ドラゴンのすぐ側に人影を見たという噂を聞いたことがあります」

「人影？ ドラゴンが人と一緒にいたのか？」

カイルが驚きの声をあげる。

「いえ、あくまで噂でして、わたしも見たことはありません……そもそもドラゴンがこんな人目に

つくような行動をするなんて初めてで……」

エリナは難しい顔になる。

「まあ、そこら辺は後で直接聞いてみれば解ることじゃ」

「……は？」

シルドニアが当然のように言うので、エリナは思わず間の抜けた声を出す。どういふことか聞き返そうとしたその時、開門の鐘が鳴り響き、重々しい音を立てて大門が開いていった。

「じゃあ行くとするか」

カイルが皆に告げ、一行は門に向かった。



エッドスの森の特徴としてまず挙げられるのは、過酷な環境だ。

気温が高く、高い湿度とも合わさって、移動するどころかただ立っただけで体力を消耗してしまう。

地形そのものも起伏が大きく、移動しにくくて迷いやすい。

そして最も恐ろしく、最も警戒しなければならないものは、この地に棲まう狂暴な魔獣達だ。

念入りな準備と森を熟知した者の支援がなくなれば、半日生き延びることすら奇跡、と言われるほど危険な森なのである。

(……そのはずなだけ……)

森を進んで半日が経つ頃、エリナはカイル達によって、自分の経験と常識が覆される気分を味わされていた。

「ふう、やっぱり買っておいでよかったわね、これ」

涼しげな顔でこう言うリーゼは、この高温多湿の中で汗一つかいていない。皆が羽織っているフー  
ド付きマントのおかげだ。

そのマントをよく見てみると、白い煙のようなものが発せられ、周囲に漂っている。これは冷気系魔法を付与された魔道具だ。羽織ることで身体全体が冷気で包まれるという、携帯型の冷房装置である。

「そうですね……」

エリナも噂以上の性能に驚いていた。もしこれがあつたなら、普段の採集仕事もさぞ捗ることだろう。

だが、冷気系魔法を魔道具に使うのは技術的に難しいので、この品は希少性が高く、非常に高価だ。しかも使い捨てで、費用対効果が高いとは言えない。

冒険者達は金を稼ぐためにこの森に来るのであって、赤字になるようでは元も子もない。いくら快適に過ごせるとはいえ、使用する者はあまりいなかった。

だがカイル達はそれを人数分、しかも予備を含めて用意していた。リネコルの街にあった在庫を全部買ったのだろう。おそらくその総額はエリナに払う報酬を超えるはずだ。

おかげでスムーズに森の中を進めている訳だが、それはカイル達の身体能力がとても高いためでもあった。

森の住人であるエルフのウルザはともかく、カイルやセラン、リーゼまでが凄まじい体力を持っていて、案内人であるエリナもついて行くのがやっという有様だった。

中でも異様なのはシルドニアで、彼女だけ冷気のマントを着ていないというのに、顔色一つ変えず、まるで体重がないかのように軽やかな印象だ。

次にエリナは、目の前に横たわる、小山のような図体のワイルドボアという魔獣に目をやる。通常の猪の十倍はあろうか。

ワイルドボアの毛皮と厚い脂肪は並の金属鎧よりも遥かに強固で、その上生命力も強い。巨体から繰り出す突進は、木々を紙屑のように弾き飛ばしてなぎ倒す破壊力を誇る。軍の重装歩兵小隊でも全滅しかねないほどの強敵だ。

エリナのようなソコの冒険者にとって、怒れるワイルドボアとの遭遇は死を意味している。

それほど危険な魔獣を、カイルはただの一撃で仕留めたのだった。

ワイルドボアは、しっかりとした準備をした一流冒険者が数人がかりでやっと倒せるかどうかの魔獣で、間違っても一人が一瞬にして倒せる相手ではない。それが今までのエリナの常識であった。先ほど不意の遭遇をしたのだが、彼は突進してくるワイルドボアに対してあくまで冷静に立ち向かった。

ぶつかる直前に真上に跳んで回避すると、そのまま空中で抜剣。ワイルドボアの延髄にある、脂肪が薄く骨もない急所を寸分たがわぬ正確さで貫いた。

まさに瞬殺。ワイルドボアはその後もしばらく突進を続けたが、やがてようやく自分が死んだことに気付いたかのように、地響きを立てて倒れた。

そのカイルの動きを把握できていたのはセランだけだ。ウルザとリーゼは目で追うのがやっと、エリナに至っては視認すらできなかった。

「皆さん……凄いですね……」

エリナが呆気にとられた声を出す。

「いや、エリナに事前にここらにいる魔獣の種類や、急所の場所を教えてもらっていたおかげだ。それに前もって警告してくれたおかげで効率よく対処できたよ。ありがとう」

本当に何でもないことのようにカイルは言う。

「いえ、そんな……」

案内人でありながらこれまでほとんど役に立てていないエリナは、すっかり自信を喪失している。

「で、どうするこれ」

セランが横たわるワイルドボアを指さす。

「血の匂いで、他の魔獣が寄ってくるかもしれません。そろそろ日が傾いてきましたから、急いでここから離れた方がいいです」

我に返ったエリナは自分の役目を思い出し、カイル達に警告する。

「ああ、それなら大丈夫だ。消臭用の魔道具を用意してあるし、魔獣避け<sup>よ</sup>の結果もあるから、ここでキャンプでいいだろう」

カイルの言う魔道具は、どちらもマント同様とても高価である。

「じゃあせつかくだから、今晚はイノシシ鍋にでも……」

「あ、静かにお願いします」

リーゼが小山のようなワイルドボアを見上げ、今夜の献立を提案した時、何かに気付いたエリナが、小さくも鋭い声で警告する。

「この羽音は……キラビーですね。大型の蜂で、主に花の蜜を集めますが、雑食性なので肉も食べます。人族も平気で襲ってきます」

それが群れで近づいてきています、とエリナは警告する。

「……よく気付いたな。私でも今ようやく聞こえてきたというのに」

耳を澄ませていたウルザが、感心したように言う。

先ほどのワイルドボアの出現時もそうだったが、人間よりも聴覚が優れるエルフのウルザよりも先に、エリナは気付いている。

「え、ええ……そうでもなければ生き残れませんし……それよりキラビーは、個体の強さはそれほどではありませんが、飛んでいることと数が厄介です。やはりここからすぐに離れた方がいいです」  
今なら充分逃げられます、とエリナ。

それなら無駄に戦うこともないかとカイルは移動しようとするが、シルドニアがそれを遮る。

「待て……ということはキラビーの巣が近くにある訳じゃな？」

鬼気迫ると言ってもいいくらいの迫力で、難しい顔をしたシルドニアが聞く。

「え、ええ……そ、そういうことになりましたが……？」

その迫力に押されたのか、エリナは半歩後ろに下がりながら答えた。

「……キラビーの蜜は普通のハチミツよりも濃厚で、滋養強壮に効く上、美容にも良いのじゃ。ザールス時代も珍重されておった」

「そ、そうなの？」

シルドニアが呟くと、美容にも良いという部分にリーゼが食い付く。

「うむ、そして肝心の味もまた極上じゃ……口に含むと脳に直接響くかのようなとろける甘さが広がるのだが、それでいて不思議とくどさはない。喉越しもよく、喉から鼻にかけてくすぐるような風味が広がり、心地よい余韻がいつまでも残る……まさに究極の蜜じゃな」

シルドニアの熱の籠った語り口に、リーゼもウルザも思わず生唾を呑み込む。

「カイル、セラン……頼んだわよ！ 今夜はイノシシ鍋とハチミツたっぷりのパンにしてあげるから！」

リーゼが握り拳を作りながら言う。

「二人とも……どんな犠牲を払ってでもキラビーの巣からハチミツを取ってくるんだ！」  
意外と甘いものの好きのウルザも、二人に発破を掛ける。

「行くのは俺達かよ！」

それほど甘いものの好きではないセランが文句を垂れる。

「……ちよつと食い合わせ悪くないか？」

今夜のメニューを想像して、何となくカイルの顔色が悪くなる。

「ええい！ ぐだぐだ言わずに気合いを入れて狩ってこい！」

シルドニアが叫ぶと、女性三人の妖しい目の輝きに気付いたカイルとセランは回れ右をして、現

れたキラビーの群れの方へ向かう。

ああいう状態の女達には逆らわない方がいい——二人は半ば本能でそう理解した。

「……凄いな達だなあ……」

何とか言葉を選んで感想を漏らすエリナだった。

このように、採算度外視の念入りすぎる準備とカイル達の能力の高さのおかげで、探索は思いのほか快適で充実したものとなっていた。

## 6

日がほとんど暮れ、僅かに西の空に明るさが残る中、カイル達は焚火を囲んで食事をとっていた。こういった野営での食事は保存食品で済みます場合が多い。内容は固いパンや干し肉、他には精々チーズや木の実といったところで、とりあえず栄養補給になればいいという、無味乾燥な食事になりがちだ。

しかし今夜は、野営中だというのに非常に豪華だ。

リーゼの宣言通り、焚火にくべられている鍋の中では、新鮮なワイルドボアの肉やジャガイモのような根野菜が煮えており、食欲をそそる匂いをあたりに充満させている。

他にも、エリナが採取してきたこの森特有の果実に加え、保存に適さないはずの生野菜のサラダや、生魚の料理までが並んでいた。

これはリーゼが下拵え<sup>しなごしら</sup>をしておいた特製料理だ。本来はそれほど日持ちしないのだが、わざわざ【プリザーベーション】という保存魔法の使い手に依頼して、半永久的に瑞々<sup>みずみず</sup>しさを保たせている。それにかかる手間や費用は、大国の首都にあるような貴族御用達の店でもやらないほど採算を度外視したものだ、その価値はあった。事実、この旅路で食事に不満が出たことは一切なかった。特に今日は、キラビーのハチミツという滅多に食べられない高級食材がある。その甘露<sup>かんろ</sup>さに女性陣は揃って頬を緩ませている。特にウルザはまさに恍惚<sup>こうこつ</sup>と呼ぶべき表情になっており、話しかけても返答がないくらい夢中だった。

無論、周囲の警戒は怠っていないし、念には念を入れて魔獣を寄せ付けない結果も張っている。それ故、死と隣り合わせの森とは思えない賑やかな雰囲気がこの場に漂っていた。

「しかし、でっけえ木だよなあ」

食事を終えてひと息ついたセランは改めて辺りを見渡すと、感心とも呆れともとれる声をあげ、

目の前に生えている巨木を見た。

周りを囲うには大人が数十人は手を繋がないといけないような巨木だが、この森には同じくらい大きな木が至る所に生えている。

「こんな木、リマーゼにはなかったよね……樹齢何百年くらいだろ？」

リーゼも故郷を思い出しながら、地元では決して見ることのなかったほどの巨木を見上げる。

「いや、この大きさは精々数十年といったところじゃ」

食後にハチミツをたっぷり入れた紅茶を飲みながら、シルドニアが言う。

「これは魔法樹と言って、地に流れる魔力である地脈を養分として育つ樹木じゃ。ここエッドスの地脈が濃く育ち、大型になる……そして魔法樹をはじめ魔力の強い植物を餌とする草食の魔獣や幻獣、更にそれらを食べる肉食の魔獣や幻獣が、この地に棲み着くという訳じゃな」

紅茶の味に満足気な表情を浮かべながら、シルドニアが語る。

「へえ、どうりで……」

この森に来てから妙に大きい植物ばかり見ていたことを、リーゼが思い出す。

「詳しいですね」

エリナが驚いた様子で言うと、シルドニアは当然と言わんばかりに得意になって更に語り続ける。

「古来、地脈の流れはこの地が大陸で最も濃い。それ故ここに地脈を利用した数々の魔法実験施設

を造らせ、彼らが魔法王国ザールスの繁栄の礎<sup>いしづえ</sup>となったのじゃが……その跡地が遺跡となって今の世に残っておるとは……移ろうは世の宿命<sup>さだめ</sup>とはいえ、儚い<sup>はかな</sup>ものよ」

栄枯盛衰<sup>えいこせいすい</sup>よのう、と陰を帯びた笑みを浮かべつつ首を横に振り、しみじみと感傷に浸るシルドニア。どうやら美味<sup>おい</sup>しい物を食べたので機嫌<sup>きげん</sup>が良くなり、饒舌<sup>じょうぜつ</sup>になっているようだ。

「えっと……造らせた、って？」

「ああ、気にしないでくれ……それよりこれからの日程<sup>しつてい</sup>なんだが」

シルドニアの発言にエリナが首を傾げるが、その疑問を誤魔化<sup>ごまか</sup>すように、カイルが話しかける。

「あ、はい……えっと、予想では六日でしたけど、これなら三日もあれば『竜の巣』に着くと思います」

エリナは地図を取り出して説明する。

「ただこれは最短距離をとった場合で、そうするとダークエルフ達の活動範囲を突っ切ることになります。もし完全に避けたら、大きく迂回しなければなりません」

「ふむ……もし突っ切った場合、遭遇せずに潜り抜けることはできるかな？」

「向こうの縄張りですし、今は密猟で警戒度が高まっているから難しいと思います。わたしとしましては、迂回することをお勧めします」

「そうか……」

エリナの答えを聞いたカイルは考え込む。現状、急ぐ必要はない。もしダークエルフと遭遇した

場合、どう考えても友好的にすませられるとは思えないし、敵対するとなればかなり厄介な事態になるだろう。

ただここで問題になるのはやはりドラゴンのことだった。活発に行動している理由が非常に気になるのだ。もし何らかの問題がドラゴン側に起こっているならば、無理をしても早めに行った方がいいのかもしれないが……

「あの……何か問題でも？」

悩むカイルを見て、何か失敗したのかと不安になったエリナが様子を窺う。

「……やはり迂回していく。ただしなるべく早く行きたいので、ギリギリのルートでお願いしたい」

「は、はい！ 解りました！ できる限り最短で行きます」

ほっとしたような声を出して、エリナは大きく返事をした。



どこまでも濃い闇が続く深夜。時折遙か彼方から魔獣の雄叫びらしき声が聞こえる以外は静寂に包まれており、焚火のパチパチという音が妙に響く。

結界を張ってあるとはいえ不測の事態は起こりうるので、交代で見張りを立てている。今はカイ

ルとリーゼの番だ。他の四人はぐっすり寝入っている。

シルドニアは睡眠をとる必要などないのだが、皆が気持ち良さそうに寝ているのに自分だけ起きているのは気に食わない、という事で最近と同じく寝るようにしていた。

「ねえカイル、ちょっと聞いていい？」

焚火を挟んで向かい合い、いつも通りの他愛ない会話を続けていた二人だったが、リーゼが少し改まって話しかけた。

「エリナだけど……お金が欲しい理由は聞いたの？」

そう言うと、少し離れた所で横になって休んでいるエリナに、ちらりと視線を向ける。

「いや、聞いてはいないが？」

「そう……ウルザも気にしていたけど、あそこまで必死なのは何でかなと思って」

今日一日、ほんの僅かでもカイル達の機嫌を損ねないようにと、かなりエリナが気を使っていたことを、カイルは思い出す。

「……まあ、あまり立ち入ったことを聞くのもな。何らかの事情があるのは間違いないだろうが、金が必要な理由なんて人それぞれだ。もしかしたら、それは彼女にとって踏み込まれたくない領域かもしれない……エリナの案内は、問題ないどころかとても的確で、助かっている。終わった後で依頼料を払えば、それで問題ないだろう」

カイルは自分に言い聞かせるように、わざと少し冷淡に言った。

自分でも理由はわからないが、エリナのことが妙に気になることは自覚している。これが所謂恋愛感情なのかただの同情なのかは判断がつかないので、エリナとは雇用関係のみと割り切っていて内面に立ち入らないようにしているのだ。

それは、リーゼに対して後ろめたさを感じるからだろう。

「ふん……まあそれがいいかもね」

そんなカイルの内心を知ってか知らずか、リーゼの目つきは少し不審げだった。

そのまま二人の間に沈黙が流れる。カイルはその気まずい空気を打ち消すかのように、日頃言えていなかったことを口にする。

「な、なありーぜ、その、なんだ……いつもありがとうな」

「……どうしたの、改まって？」

急にお礼を言われたので、リーゼは驚いたような反応を見せた。

「いや、お前が色々とサポートしてくれているおかげで、この旅は何とかなっているからな……」

これまで快適に過ごしてきたのは、洗濯や料理、衣服のちよつとした繕いなどの雑事をリーゼが一手に引き受け、完璧にこなしてくれるのおかげだった。特に毎度の食事は一日の楽しみになっているくらいだ。

「はは……お母さんのおかげだね」

はにかんだ笑顔でリーゼが言うと、カイルも今は亡きリーゼの母、エティのことを思い出す。

エティは身体が弱く、リーゼの母親とは思えないほど儂げな女性だったが、笑顔が素敵で、カイルにも優しくしてくれた。

家事が得意な彼女は常々『美味しい物を食べれば自然と人は笑顔になる、だから好きな人を射止めたければ料理を頑張りなさい』とリーゼに言っていた。だからこそ、今の腕前がある。

「感謝してるんだぜ、本当に……リーゼだけでなくウルザや、ついでにセランにも……俺の我が儘に付き合ってくれてるんだからな」

感謝の言葉を述べながらも、カイルの顔に少し影が差す。

リマーゼを旅立ち、既に半年以上が過ぎていた。思い返すも大変な旅路だったが、これまで何とかなってきたのは、リーゼ達がいてくれたからだ。

カイルにとってこれは本当に嬉しいことなのだが、同時にどこか申し訳なさを感じてもいた。自分がしていることは世界を救うためであって、その正しさが揺らぐことは絶対にない。だが、そのためにリーゼ達に負担を強いているのか、巻き込んでいいのかと考えてしまうのだ。

勿論このまま事態を放置すれば、いずれ起こる『大侵攻』により人族は壊滅的ダメージを受け、リーゼ達の命も消えさる。

だが、だからといって命の危険と隣り合わせのこの旅につき合わせるのは本末転倒ではないか、時折そう自問自答してしまうのだ。

ならばいつそのこと真実を——自分が人生をやり直しているということを話してしまおうかとも考えるが、それにはまだ踏ん切りがついていなかった。

（俺は……リーゼに何をしてやるんだろうか？　どうやって報いればいいのだろうか……）

カイルが考え込んでしまうと、何かを感じ取ったリーゼは立ち上がり、カイルに近づいていた。「え……？」

リーゼはそのまま無言でカイルの隣に座る。

「お、おい……」

何かを言おうとしたカイルだったが、黙って身体を預けてくるリーゼの顔を見て、口を閉じた。少し肌寒くなつた夜の空気の中で、リーゼのぬくもりは心地よかった。

「……大丈夫、あたしは何があろうと側にいるからね」

しばらく静寂が続いた後のリーゼの声は、カイルの心に染み入るかのようだった。

カイルが何を悩んでいるか、リーゼは正確には解っていない。だが若干弱気になっているのはよく解る。それに対して自分ができることをしたのだ。

何があろうとも一緒にいる。

リーゼの気持ちはカイルにも充分に伝わっていた。もし視界の範囲内に皆がいなければ、リーゼを思いつきり抱きしめていただろう。

代わりに、自分の肩に乗ったリーゼの頭に手をやり、気持ちを込めて髪をそつと撫でる。

「ん……」

リーゼはまるで猫のように、気持ちよさそうな吐息を漏らした。

その後もカイルはリーゼを撫で続けたが、そのい・ち・や・つ・きを見張りの交代のために起きたセランに見られ、思いつきからかわれることとなる。

翌朝、妙に機嫌のいいリーゼと、微妙に不機嫌そうなカイル、何故か負傷していながらもやついて二人を眺めるセランを見て、ウルザは首を傾げるのだった。

7

それから二日後の、間もなく昼になる頃。カイル達は最早密林と言つていいほどに深い緑の中で、背の高い雑草を掻き分けつつ進んでいた。